

## 第五講 歴史の場としての国民（ネーション）

【前回のレポート講評】：「史料は自ら歴史を語るのか？」

過去を知るには史料しかなく、史料がなければ歴史は語れないし、証拠という意味では史料は自ら歴史を語っているのではないかという意見があった。史料に基づいて歴史を再構成していくというのは歴史学の、そして文化史学の大前提である。

しかし、単純に史料を集めてくれば歴史が語れるのかということ、そうとも言えないことが多々生じて来る。そこからレポートの中で個々の史料の誤りや誤解、誇張や歪曲の可能性を指摘するものがあり、他の史料との比較検証によってそのような問題点を改称しなくてはならないという意見が現れる。単純に史料があるから歴史を語れるわけではないという訳だ。複数の史料を組み合わせることでそのような誤謬を回避できるという。

でも複数の史料があるだけでは問題は解決しないという指摘もレポートには見られる。どの史料が信用出来て、どの史料のどの点に問題があるのかを判別する必要がある、というのがその理由である。結局は史料を扱う歴史研究者の判断・解釈・評価によるという意見が出されてくる。つまり、史料を組み合わせれば客観的な歴史が可能かということそうでもなく、結局は歴史研究者による解釈によって歴史は叙述されるのだから、そのような意味で、結局は歴史研究者が歴史を作ると結論される。

ここで言われる歴史研究者が単数なのか、それとも複数なのかということを考えて欲しい。そうすると歴史研究のトレンド、変化を探っていくことができよう。

講評参考史料：藤原行成『権記』：藤原道長の側近。

蔵人頭として一条天皇に仕える。

夢の中で小野道風から書法を教えられるという話を記述。

キモンのエウリュメドンの戦いについて

トゥキュディデスとプルタルコスの記事。

決定的な勝利と伝えられる。

アテナイのプロパガンダとしての側面は？

【レポート課題】：何故、歴史は国民史として語られるのか？

何故、歴史は国民史として語られるのか？

ベネディクト・アンダーソン（白石隆・さや 訳）『定本想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行 -』  
書籍工房早山、2007年の衝撃。

言葉が国民を作ってきた。

近代以前：多言語な世界。国家は王という人格を通して形成された多様な言語世界を結合体。

近代：単一言語化による国民形成。

長谷川秀樹「現代フランスにおける言語問題 - 地域語と欧州少数地域言語憲章をめぐる -」

『立命館国際研究』12 - 3、2000年、217 - 234頁。

オイル語・オック語・カタルーニャ語・アルピタン語・コルシカ語・アルザス語・フランコニア語・フランドル語・ブルトン語・バスク語

革命当時、フランス語を話していたのは2500万人中300万人に過ぎなかった。

1918年 アレマン語の禁止

1992年 共和国憲法（改正）第2条：「共和国の言語であるフランス語」と規定

1994年 トゥーボン法（フランス語の使用に関する法）：外来語の使用制限・罰則

フランスの国家的分裂を招く

2006年 アメリカの会社の英語使用に対する罰金刑

オーストリア・ハンガリー帝国の国章（1915年制定）

二つの盾：オーストリア（左）とハンガリー（右）。

盾を支えるグリフィンはオーストリア、天使はハンガリーを象徴。

盾の中にハプスブルク帝国に編入された諸地域の紋章

(イストリア、ガリツィア、クロアチアなど)

歴史が論じられる「場」の問題（近代歴史学の問題）

民族（国民）という「場」

近代が与えてきたもの

せいぜいフランス革命にまでしか遡れない

現代は〈トランス〉を場とするようになっている。

オイゲン大公：18世紀の軍人

北イタリア・サボア大公国の生まれ・フランスに移  
住・ハプスブルク家に仕える。

場のトランス

ロンドン郊外のサザク：聖と俗の場・政と性の場のトラン  
ス

モルトケ：デンマーク出身

プロイセンに仕える

アルキビアデス：アテナイの政治指導者

スパルタに亡命

ペルシアに亡命

アテナイに帰国

再び亡命

参考文献

ベネディクト・アンダーソン（白石隆・さや 訳）『定本想像の共同体 -  
ナショナリズムの起源と流行 -』書籍工房早山、2007年。

大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007年。

パトリック・ギアリ（鈴木道也・小川知幸・長谷川宣之 訳）『ネイショ  
ンという神話 - ヨーロッパ諸国家の中世的起源 -』白水社、  
2008年。

田中・中井・朝治・高橋（編）『境界域からみる西洋史 - 文化的ボーダー  
ランドとマージナイティィー -』ミネルヴァ書房、2012年。